

機関番号： 14501
 研究種目： 基盤研究（B）
 研究期間： 2007～2010
 課題番号： 19330127
 研究課題名（和文） インクルーシブな地域社会創成のための都市型中間施設における実践の理論と方法
 研究課題名（英文） Theory and methodology of the practices for inclusive society in urban intermediate institutions
 研究代表者 津田英二 (Eiji Tsuda)
 神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授
 研究者番号： 30314454

研究成果の概要（和文）： 都市型中間施設の概念を実践的に検討し、実践的研究に基づいて、インクルーシブな地域社会創成に向けた都市型中間施設の効果を次の各点から示した。①さまざまな人たちや多様な社会問題と出会う機会が多いほど、個別の社会問題に対する当事者性が深まる傾向があることを示した。②特定の社会問題に主体的に取り組むことによって、その他のさまざまな社会問題への関心や行動にもつながっていく可能性を示した。③多様な人々が自由に入出入りする空間に、意図的にマイノリティの参加を促すことによって、参加者全体にインクルーシブな社会をめざそうとする機運が生まれる傾向を示した。④インクルーシブな社会をめざす途上で、一定の統制された環境の下では、多様な他者の間に起こる葛藤が社会的紐帯を強化することがあることを示した。また、韓国におけるインクルーシブな地域社会創成に向けた実践と連携した共同研究も実施し、東アジア的風土の固有性を踏まえた実践のあり方や方法についての議論を深めた。

研究成果の概要（英文）： We examined the concept of urban intermediate institutions, and demonstrated its ability to contribute to the effort for inclusive society. We demonstrated by action research as follows; 1) when a person has chance to meet diverse people and many social problems, he/she tends to deepen the consciousness of the individual social problem. 2) when a person spontaneously acts to solve a particular social problem, he/she tends to extend the interest and action on the other diverse social problems. 3) controlled inclusive situation where minority people participate among others tends to make participants attempt to generate inclusive society. 4) conflicts among diverse people in practices for inclusive society have potential to strengthen social ties in certain controlled environment. Also we collaborated with Korean practices for inclusive society and deepen the concept and methodology of practices under the locality of East Asia.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2008年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2009年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2010年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
年度			
総計	14,500,000	4,350,000	18,850,000

研究分野： 社会科学

科研費の分科・細目： 社会学・社会福祉学

キーワード： 地域福祉・コミュニティソーシャルワーク

1. 研究開始当初の背景

社会的排除 social exclusion、その対義語である社会的包摂 social inclusion は、ともに国連や EU などを通して、世界各国が連帯して取り組もうとしている現代的課題を表現するキーワードとなっている。問題となっているのは、多くの個人や集団が多面的かつ構造的に排除され、権利や制度を享受できなくなっている状態であった。社会的排除を改善し、インクルーシブな社会を創成するための留意点として、第一に単一の課題のみに着目するのではなく、諸課題の絡み合いに着目すること、第二に社会的に排除されている人たちの自助努力だけでなく、公的な援助を含め、すべての社会構成員全体の協力を中心に考えざるをえないことなどを挙げることができる。社会的排除の問題が深刻化する背景には、社会の機能分化が進み、社会的紐帯を形成する基盤が弱体化していること、社会サービスが専門特化しすぎた商品となってしまうこと、私的領域が拡大しすぎたことなどがあるからである。本研究では、こうした社会的背景に基づき、地域社会におけるインフォーマルな関係形成による自律的課題解決を支援するしくみとして「都市型中間施設」という概念を位置づけ、実践的研究を行った。

2. 研究の目的

社会的排除に抗するインクルーシブな社会を形成するための、地域社会における都市型中間施設も出る及び活動モデルを創出する。

3. 研究の方法

私たちが設立・運営している実践的研究のフィールドである「のびやかスペースあーち」を舞台にして、都市型中間施設の理念に基づく実践をモデル化し、その効果を考察する。また、インクルーシブな社会を形成するための実践を支える人々の意識を調査し、実践モデルの切り口の妥当性を検証する。さらに、海外のインクルーシブな社会をめざす実践と連携し、文化的背景に基づく実践モデル、活動モデルを見当する。

4. 研究成果

都市型中間施設の概念を実践的に検討し、その概念を体現するモデルとして「のびやかスペースあーち」（神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設）を運営し、実践モデルを形成した。この施設モデル、実践モデルを通して実践的研究を行うことを通して、インクルーシブな地域社会創成に向けた都市型中間施設の効果を次の各点から

示した。

1) さまざまな人たちや多様な社会問題と出会う機会が多いほど、個別の社会問題に対する当事者性が深まる傾向があることを示した。これは、実践的研究の中で形成された問題意識を軸に行った都市部住民を対象としたアンケート調査の結果によって明らかになった知見に基づく成果である。

2) 特定の社会問題に主体的に取り組むことによって、その他のさまざまな社会問題への関心や行動にもつながっていく可能性を示した。これも、都市部住民を対象としたアンケート調査の結果によって明らかになった知見に基づく成果である。

3) 多様な人々が自由に出入りする空間に、意図的にマイノリティの参加を促すことによって、参加者全体にインクルーシブな社会をめざそうとする機運が生まれる傾向を示した。これは、都市型中間施設の実践モデルを形成している「のびやかスペースあーち」における利用者悉皆調査によって得られたデータを分析した成果である。

4) インクルーシブな社会をめざす途上で、一定の統制された環境の下では、多様な他者の間に起こる葛藤が社会的紐帯を強化することがあることを示した。これは、都市型中間施設としてモデル化した「のびやかスペースあーち」における実践的研究の成果として表れた知見である。

インクルーシブな社会をめざす実践をめぐる知見を生み出す研究方法論として、エピソード分析に基づく質的研究の方法論を提示することができたのも、私たちの研究の中では大きな成果となった。これは、実践的研究の深化に伴い、インクルーシブな社会が、住民間の相互性、共同主観、感情の交流といったことを重要な要素としていることが明らかになったことにより、それらの諸要素を組み込んだ研究成果の示し方を模索する中で選出された方法論である。

また、主に韓国におけるインクルーシブな地域社会創成に向けた実践的とも連携し、東アジアの風土の固有性を踏まえた実践のあり方や方法についての議論を深めた。イギリス、中国等、また日本においてインクルーシブな地域社会創成に向けた実践的研究を行っている実践者・研究者とも討議を行う機会を積極的に設け、文化と実践との関係についての認識も深めた。

研究成果報告書を毎年冊子体にまとめ、実践と研究との双方向的なコミュニケーションに役立てたことも、研究成果の一部ということができよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計 28 件)

- ①劉小賀・津田英二他、インクルーシブな社会をめざす実践における葛藤の積極的な意味～自閉症児のストレス表出に対する他者の反応をめぐる考察～、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、Vol. 4、No. 2、2011 年、pp. 39-48、査読有
- ②原田正樹、身近な地域における福祉活動に今、求められること、月刊福祉、Vol. 94、No. 1、2011 年、pp. 12-17
- ③植戸貴子、知的障害者の地域生活のための支援と仕組みづくり～障害者相談支援専門員等を対象とした聞き取り調査から～神戸女子大学健康福祉学部紀要、Vol. 3、2011、pp. 1-13
- ④ M. Suemoto, Evenements de la vie et particularite' du processus de formation au Japon, in Martine Lani-Bayle et Marie-Anne Mallet (coordination), Eve'nements et formation de la personne. Tome 3 L'Harmattan, fe'vrier, 2010, pp. 195-213
- ⑤寺村ゆかの・伊藤篤、子育て支援「つどいの広場」における相談のあり方に関する一考察-大学サテライトにおける相談(2007～2008 年度)分析を通して-、心の危機と臨床の知(甲南大学人間科学研究所紀要)、No. 11、2010 年、pp. 71-78
- ⑥津田英二・久井英輔、今日的市民性の要件と課題に関する基礎的考察～E S D の観点からみた多様な社会問題への関心・行動の付置連関と誘因～、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、Vol. 4、No. 1、2010 年、pp. 177-185
- ⑦津田英二、障害の問題についての当事者性は社会問題への認識とどう関わるか、日本福祉教育・ボランティア学習学会年報、No. 15、2010 年、pp. 15-24、査読有
- ⑧津田英二、インクルーシブな社会をどう実現できるか、研究紀要(兵庫県人権啓発協会)、第 11 輯、2010 年、pp. 29-43
- ⑨Suemoto, M., Histoires de vie - l' arc qui relie le Japon et la France, Chemins de Formation au fil du temps, Numéro 15, 2010, pp 45-47
- ⑩ Suemoto M., Evenements de la vie et

particularite' du processus de formation au Japon, Martine Lani-Bayle et Marie-Anne Mallet (coordination), Eve'nements et formation de la personne. Tome 3 L'Harmattan, fe'vrier, 2010, pp. 195-213

- ⑪寺村ゆかの・伊藤篤、子育て支援「つどいの広場」における相談のあり方に関する一考察-大学サテライトにおける相談(2007～2008 年度)分析を通して-、心の危機と臨床の知、Vol. 11、2010 年、pp. 71-78
- ⑫伊藤篤、障害児の放課後保障に関する一考察-神戸市学童保育における障害児受け入れ実態調査から-、子ども家庭福祉学、No. 9、2010 年、pp. 49-59、査読有
- ⑬寺村ゆかの・伊藤篤、子育て支援「つどいの広場」における相談のあり方に関する一考察Ⅲ - 大学サテライト施設でのアウトリーチ・サービス構築と相談実態・内容の整理-、心の危機と臨床の知、No. 12、2010 年、pp. 95-104
- ⑭朴木佳留緒、神戸大学の女性研究者支援-「神戸スタイル」によるシステム改革-、バイオフィリア Biophilia (アドスリー刊) Vol. 6 No. 1 2010. 3 pp. 71-74
- ⑮高橋真琴・津田英二・久井英輔、特別な教育的ニーズに関わる支援者の態度形成、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、Vol. 2、No. 2、2009 年、pp. 83-92
- ⑯津田英二、地域における障害者福祉のための行政の役割と課題、ナザレ大学、ファン・ファンソン道議員室、地域社会における障害者福祉と当事者主義、2009 年、pp. 59-71
- ⑰쓰다 에이지 (津田英二)、지역에 있어 장애자 복지를 위한 행정의 역할과 과제, 지역사회에서의 장애인 재활복지와 당사자주의, 2009 年、pp. 5-15
- ⑱末本誠、字誌づくりに関するエスノグラフィ-研究、東京・沖縄・東アジア社会教育、東アジア社会教育研究、No. 14、2009 年、pp. 178-188
- ⑲新崎国広、都道府県社会福祉協議会における介護等体験の実施状況に関するアンケートの結果と分析、日本教育大学協会、教育活動とボランティアに関する検討プロジェクト報告書、2009 年、pp. 45-60
- ⑳新崎国広、「なぎさの福祉コミュニティ」

概念の地域福祉における位置と可能性、大阪教育大学発達人間福祉講座、発達人間学論叢、No.13、2009年、pp.39-47

21 新崎国広、教育と福祉の協働による福祉教育の意義、発達人間学論叢、No.10、2008年、pp.73-81

22 植戸貴子、知的障がいのある人たちの地域の居場所づくり、神戸女子大学文学部紀要、Vol.41、No.2、2008年、pp.126-133

23 朴木佳緒留、大規模自治体の職場のジェンダー問題(3)、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、Vol.1、No.2、2008年、pp.163-173

24 富永恭世・津田英二他、インクルーシブな社会に向けた教育の概念と課題、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、Vol.2、No.1、2008年、pp.159-171

25 末本誠、人生の出来事<ライフ・イベント>と学び、日本社会教育学会編、日本の社会教育、Vol.52、2008年、pp.26-38、査読有

26 伊藤篤、福祉教育・ボランティア学習における評価手法の基礎的検討、日本福祉教育・ボランティア学習学会年報、No.12、2007年、pp.30-51、査読有

27 清水伸子・津田英二、インフォーマルな形態での福祉教育実践におけるデータに基づく評価枠組み形成モデル日本福祉教育・ボランティア学習学会年報、No.12、2007年、pp.94-115、査読有

28 植戸貴子、知的障害者の地域生活移行とソーシャルワーク、ソーシャルワーク研究、Vol.33、No.2、2007年、pp.88-94、査読有

[学会発表] (計14件)

①津田英二、韓・日発達障害人自立支援体系樹立のための共同研究、2011年韓・日国際学術交流シンポジウム、2011年1月26日、韓国ナザレ大学

②末本誠、フランスのライフヒストリー成人教育研究の動向について、2010年韓国成人継続教育研究会秋系学術大会、2010年11月20日、釜山大学

③植戸貴子、知的障害者が安心・安全に地域で暮らし続けるための支援と仕組みづくり～障害者相談支援専門員等を対象とした聞き取り調査から、日本社会福祉学会第58回

大会、2010年10月10日、日本福祉大学

④伊藤篤、次世代育成支援プログラム「赤ちゃんふれあい体験学習」の効果—小・中・高校生に見られた乳児に対する共感性の変容に着目して—、日本子ども家庭福祉学会第11回全国大会、2010年6月6日、目白大学

⑤新崎国広、学校教育実践における福祉教育教材の比較研究、日本福祉教育・ボランティア学習学会、2009.11.29、日本福祉大学

⑥松岡広路、福祉教育・ボランティア学習の近未来を展望する、日本福祉教育・ボランティア学習学会、2009.11.28、日本福祉大学

⑦津田英二、地域社会での障害者福祉活性化のための地方自治体の役割と課題、2009年韓・日国際学術大会、2009年1月30日、韓国・忠清南道庁

⑧横須賀俊司、日本における障害者の当事者性の意味と展望、2009年韓・日国際学術大会、2009年1月30日、韓国・忠清南道庁

⑨津田英二、福祉教育実践の理論と構築に向けて その2、日本福祉教育・ボランティア学習学会、2008年11月30日、四国大学

⑩松岡広路、福祉教育実践の理論と構築に向けて その1、日本福祉教育・ボランティア学習学会、2008年11月30日、四国大学

⑪横須賀俊司、青い芝の会の運動から自律生活運動へ、日本地域福祉学会第22回大会、2008年6月15日、同志社大学

⑫横須賀俊司、なぜ自律生活センターは普及していったのか、日本地域福祉学会第22回大会、2008年6月15日、同志社大学

⑬新崎国広、地域福祉の推進を目的とした福祉教育実践に関する研究2、日本福祉教育・ボランティア学習学会、2007.11.25、静岡英和大学

⑭津田英二、学びの場を「反転」する、日本ボランティア学会、2007.6.24、大阪市立大学

[図書] (計17件)

①津田英二他、インクルーシブな地域社会創成のための都市型中間施設、神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター、2011年、全160頁

②平野隆之・原田正樹、地域福祉の展開、放送大学教育振興会、2010年、全204頁

③朴木佳留緒、自助・共助・公助の三者連関の中でつくられる生活経営主体—子育て支援を事例として—、(社)日本家政学会生活経営部会編、暮らしをつくりかえる生活経営力、朝倉書店、2010年、pp.33-41

④津田英二編著、インクルーシブな社会をめざす実践、神戸大学ヒューマン・コミュニティ創成研究センター、2009年、全109頁

⑤津田英二、神戸大学大学院ヒューマン・コミュニティ創成研究センター、日本社会教育学会編、学びあうコミュニティを培う、東洋館出版社、2009年、pp.257-264

⑥松岡克尚・横須賀俊司、障害者(身体障害)とその家族への相談援助演習、白澤政和・福山和女・石川久展編、社会福祉士相談援助演習、中央法規、2009年、pp.276-281

⑦原田正樹、福祉コミュニティの形成、直井道子他編、高齢者福祉の世界、有斐閣、2009年、pp.110-125

⑧原田正樹、茅野市における地域福祉計画と保健福祉の特徴、冷水豊編、「地域生活の質」に基づく高齢者ケアの推進、有斐閣、2009年 pp.296-311

⑨原田正樹、共に生きること・共に学びあうこと、大学図書出版、2009年、全103頁

⑩津田英二編著、共に生きる実践の足下を固める、神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター、2009年、全48頁

⑪津田英二編著、当事者性を育てる、神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター、2008年、全61頁

⑫津田英二、インクルーシブな社会の形成と発達、発達科学への招待、かもがわ出版、2008年、pp.62-76

⑬朴木佳留緒、見えない「発達制限」、発達科学への招待、かもがわ出版、2008年、pp.20-33

⑭伊藤篤、地域によって支援される人間発達、発達科学への招待、かもがわ出版、2008年、pp.34-47

⑮小林文人・末本誠・吳遵民編、現代終身学習論、上海教育出版社、2008年、全258頁

⑯横須賀俊司他編、社会福祉と内発的発展、関西学院大学出版会、2008年、全288頁

⑰横須賀俊司他編、支援の障害学に向けて、現代書館、2007年、全176頁

[その他]

ホームページ等

<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/zda.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津田 英二 (Eiji Tsuda)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：30314454

(2) 研究分担者

末本 誠 (Makoto Suemoto)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：80162840

朴木 佳留緒 (Kaoru Hounoki)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：60106010

伊藤 篤 (Atsushi Ito)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：20223133

松岡 広路 (Koji Matsuoka)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：10283847

横須賀 俊司 (Shunji Yokosuka)

県立広島大学生活科学部・准教授

研究者番号：60304193

植戸 貴子 (Takako Ueto)

神戸女子大学文学部・教授

研究者番号：20340929

原田 正樹 (Masaki Harada)

日本福祉大学社会福祉学部・准教授

研究者番号：40287793

新崎 国広 (Kunihiro Arasaki)
大阪教育大学教育学部・准教授
研究者番号：10362740

(3)連携研究者
なし